

西北岸一帯の水面に、およそ幅 200 m、長さ 2000 m にわたって、オニビシやヒメビシと共にヒナウキクサが生育しているのを発見した。このように、ヒナウキクサが広範囲の水域に分布するのを観察できたのは、筆者にとって初めてのことでここに発表する。(1981. 10. 15 記)

(付) ヒナウキクサの学名について :

ヒナウキクサの学名を *Lemna minima* Phil. とし、北米からの外来種として、三木茂は山城水草誌 (1936, 昭和 11 年) に発表したのが、わが国における最初であり、この野生状態を最初に発表したのは松山三 (武蔵野の植物 p.133, 1965) である。松山は東京の吉祥寺市にある井の頭公園の池で観察して、*L. minima* Phil. として報告、その後、筆者その他いく人かの発表者がいるが、学名はいずれも *L. minima* Phil. と発表して現在に至っている。

しかしながら、1980 年 9 月になって、最も信頼性の高い外国の文献に接する機会が得られ、この文献 (A MONOGRAPH OF LEMNACEAE; DEWIN HORACE DAUBS p.28-32, p.74~79, 1965) によると、ヒナウキクサの学名として使用してきた *L. minima* Phil.

は、今後、*L. valdiviana* Phil. と修正せざるをえないことが明らかになったので、ここに発表する。

上記の文献によると、ヒナウキクサの分布は南北アメリカにのみ分布することが記されているが、日本をはじめ、今後は他の諸国にもしだいに分布するにちがいないと考えられる。

なお、筆者がチリウキクサの学名を *L. valdiviana* Phil. として発表 (日本水生植物図鑑 p.137) しているのは、明らかに誤謬であることを申しあげる。私の命名したチリウキクサに該当する植物は上記の文献によると *Lemna minor* L. である。

しかし、最近、E. Landolt 博士によると極東に分布する従来 *L. minor* と呼ばれていた植物は *L. japonica* Landolt (新種) と学名が変更された。これについては更に検討する必要がある。

ご承知のように、*Lemna* 属の葉状体は微小な上に成長の時期や栄養状態によっても、外形にいろいろ変異がみられるので識別が困難な仲間であり、会員諸氏にも今後、大いに注意して研究してもらいたい水草である。

なお、1980 年 5 月に会員の大野景德先生から送られたウキクサの生品は、その後の観察でヒナウキクサであ

たことを付記する。

最後になったが、ヒナウキクサの学名の改訂に際し、文献その他のご指導を頂いた京都大学農学部の別府敏夫博士に深甚の謝意を申しあげる。

—以上—

兵庫県にもあるヒナウキクサ

角野康郎

兵庫県にもヒナウキクサの産地がある 既刊の図鑑類や『兵庫県植物目録』(1971)には出ていないので報告しておく。場所は明石市大久保町のため池。トチカガミやオニビシの繁茂する富栄養化した池の一角に、ウキクサと混って元気に生育している。冬になると多くの水鳥たちがこの池を訪れる。この池にだけヒナウキクサが分布する理由は、この水鳥たちに求められるかもしれない。なお、ヒナウキクサの同定は京大の別府敏夫氏に確認していただいた。

ムサシモ下総印旛沼畔に多産す

斉藤吉永

干拓で相当の広さを埋立てたといっても印旛沼はまだ千葉県下で一番大きいことには変りがない。かって大滝末男氏が 1972 の夏期の調査では印旛沼 (北部調整池) の透明度は 50—80 cm であったというのに 1981 では 20 cm 程の水中のササバモが見える程度に汚れている。幾回かガシャモクを尋ねても皆目見当がつかなくてまよと漁業協同組合の経営している成田市の水神の森 (佐倉宗吾で有名な舟守の甚兵衛の伝説の地) を背景とした養魚池で見事に開花したアサザの写真を撮っていると隣の池では水草を除去しているのに気付いて近寄って見ると約 800 m² にびっしり生えたトリゲモかホッサモらしいものを盛んに土手にはうりあげていた。

標本用に少量を貰って帰宅後ルーペで調べて見ると、なんとこれはムサシモ *Najas ancistrocarpa* A. Br. であった。別名マガリミイバラモと呼ばれるように果実が曲っているので区別はついたがあまり注意していなかったためにムサシモの存在を気付かなかったわけである。

千葉県植物誌 (新版) にもムサシモはリストから欠除されている。